

青少年の食意識に関する研究（第2報）

○下坂智恵* 市川朝子** 下村道子**

(*大妻女大短大 **大妻女大)

【目的】現在の我が国では、食生活をめぐる環境は著しく変化している。こうした中で青少年の食生活において、問題点が指摘され、とくに欠食、孤食、外食、偏食、過・拒食などがあげられている。そこで、中学・高校・大学生の食生活と食意識調査を行い、青少年が食に対してどのような意識をもっているのかを知ろうとした。また、1992年に行った同様の調査と比較・検討を行い、現在の傾向を明らかにしようとした。

【方法】アンケート調査は、1992年に行った調査と同様の項目で2000年4月～9月に、首都圏の中学生274名、高校生401名、短大・大学生240名を対象に行った。調査は、集合調査法により、食事に対する意識、食事のイメージ、食事の量、ひとりでの食事の考えなどについて質問し、各項目について単純集計を行い、併せてクロス集計、因子分析を行った。

【結果】食事の摂取状況については、朝・夕食ともに高年齢になるに従い、ひとりの食事が多くなり、大学生では友人と食事を一緒にすることが多くなっている。食事の意識については、中学・高校生では身体的要因に関するものが多く、女子学生においては楽しみ、豊かさなどの精神的要因に関するものが高率であった。これは、1992年とほぼ同じ傾向を示した。食事の量は、喜怒哀楽によって左右され、女子大生において、とくに感情によって食事の量が増加すると答えた率が高くなっていた。ひとりの食事のイメージは、中学・高校生は、気楽、自由、たまにならよいという肯定的な率が高く、大学生は、さみしいなどマイナスイメージの率が高くなっていた。大学生の食意識は、精神的な要因が高く、家族での食事を好む率が1992年の調査よりも上昇していた。